様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０１２０８

研究課題名（和文）先史時代人はどのようにビジュアライズされるのか: 日本列島を例として

研究課題名（英文）Visualization of Prehistoric People in Japan

研究代表者
吉田　泰幸（Yoshida, Yasuyuki）

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：２０５８５２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：先史時代のイメージ、特に人の姿を描く試みは考古学・人類学の黎明期からおこなわれている。それらのイメージは考古学的発見や研究成果に立脚しようとしながらも、結果的には様々なものに媒介された想像力の行使となっている。本研究では日本における先史時代人イメージの変遷を追った結果、「媒介」となったものは「近代人としての眼差し」、「戦後の合理主義的進化論由来の歴史物語」、「一度作られたイメージが変えられない様」であり、イメージを作り受容する我々と先史時代人のエスニシティの関係をどうみているか、その認識もイメージに影響を与えていると捉え直し、先史時代イメージを議論するためのキーワードを複数提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は考古学史研究の一部とも言えるが、これまでの同研究が扱ってこなかった部分に光を当てたものである。先史時代人イメージには考古学者も博物館学芸員も関与しているものの、研究対象としてはみなしてこなかったため、それらを語り、分析する言葉も持ち合わせていなかったと言える。本研究ではそのためのキーワードを複数提示することができた。分析の過程では本テーマが美術史、教育史、日本学研究、科学人類学と接点を持ち得ることもわかり、国際的・学際的研究につなげることができた。加えて、本研究は博物館展示をめぐるコミュニケーションを改善する手がかりになり得ると考えており、それが社会的意義のひとつである。

研究成果の概要（英文）：In Japan, popular visualizations of the remote past began in the modern era, the end of 19th century. This research project examines the transitions in how prehistoric people were visualized in Japan from these beginnings and up to the present. It raises several key terms and provides a comprehensive framework to grasp the image-production process. This kind of analysis tends to focus on the interactions between archaeology and society, regarding each as a collective body. In contrast, this project attends to a more detailed unit, that of the actors' network surrounding the visualization of prehistoric people. In this case, the term actor includes human and non-humans such as the individuals producing images, archaeological discoveries, the political climate, and the drawings themselves. Visualizations of prehistoric people mainly reflect the changes in Japanese political climate which affected archaeological practices from before and during the war to postwar era.

研究分野：考古学、博物館学、文化資源学

キーワード：先史時代　復元　考古学　イメージ　視覚メディア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

先史時代のイメージ、特に人の姿を描く試みは考古学・人類学の黎明期からおこなわれ続けている。それらの視覚イメージは考古学的発見や研究成果に立脚しようとしながらも、様々なものに媒介された想像力にゆだねる部分も多い。であれば、先史時代人イメージの変遷と、それらがどのようにつくられるのかを追うことによって、私たちが先史時代をどうみてきたかを推し量り、これからどうみていくかを構想することもできる。これが本研究を構想した理由である。構想時に把握していた課題は以下のとおりである。

(1) 批評の重要性

本研究構想時、先史時代人はどのようにビジュアライズされるのか、この問いをめぐる議論はほとんどなかった。そのため、歴史復元画を数多く手がけたイラストレーター・安芸早穂子、安芸が描いた縄文時代イメージ（小山編 1986）の監修者である民族考古学者・小山修三を招き、文化資源学セミナー「歴史復元画と考古学」を開催した（吉田・Ertl 編 2017）。このセミナーで、以下のような先史時代人イメージの問題を象徴する発言、対話があった。

考古学は過去の断片的な痕跡をもとに過去について考える。縄文時代のような遠い過去になればなるほど、発掘調査によって得られる資料、過去を知る手がかりはより断片的になるが、貝塚や低湿地遺跡は他の遺跡では残りにくいものも出土することから、「タイムカプセル」と称されることもある。福井県若狭町の鳥浜貝塚もそのひとつで、約 6,000 年前の高度な漆工技術を示す赤色漆塗りの櫛も出土している。そうした出土資料を所蔵する博物館から少し離れた一角は地元の青壮年会によって「鳥浜貝塚公園」とされており、石碑や案内板などの他に、「縄文太郎」（図１参照）という像が立っている（図１参照）。民族考古学者の小山修三は、この「縄文太郎」像に次のような疑問を呈している。

> こういうイメージはどこからきたのだろう。ギャートルズなのか（中略）髭もじゃ、裸足、荒縄腰に巻いて、なんていう姿です。何も根拠はないと僕は思いますが、これが縄文人の姿だとなって、みんな、「おぉーすごい」と思っていたわけです。ところがその鳥浜貝塚からは、赤い漆で塗った櫛が出ているのです。そのような櫛は、この縄文太郎の頭にどうやって使いますか。（中略）これを何の疑問も持たずに受け入れていたというのが、僕はおかしいなあ、と思っていたのです。（小山 2017: 79）

この発言は、実際に出土している資料とのイメージとの乖離、イメージの由来の不透明さ、そして、一旦つくられたイメージに疑問が呈されることが少ないといった先史時代人イメージの諸問題を凝縮している。

(2) イメージをめぐるコミュニケーションはどのようにおこなわれるか

セミナーは筆者の主旨説明、安芸の発表、上記発言のあった小山の発表、参加者も交えた対話パートで構成されたが、対話パートでは、復元画に唯一の「正解」を求める一部の参加者と、自らが生み出したイメージは自分たちが行った民族考古学的調査という体験に基づく「リアリティ」の提示に過ぎないことを自覚している安芸・小山との間には議論の空転もみられた。こうしたコミュニケーションは、博物館展示の受け取り方をめぐっても生じていることを考えれば、本研究が博物館学やパブリック・アーケオロジーにも貢献し得ることが予想された。

２．研究の目的

以上の１．(2) のコミュニケーションの問題は１．(1) の批評的視点が広く共有されていないことが原因となっているという状況を受けて、研究の目的を次のように設定した。

(1) 先史時代人はどのようにビジュアライズされるのか、その事例を収集する

研究の基礎資料として、これまでどのような先史時代人イメージが生み出されてきたのか、現在どのような先史時代人イメージが流布しているのかを把握することを目指す。

(2) 視覚化のメカニズムを把握する

イメージの収集にとどまらず、その変遷と多様性を把握し、それらが生じる要因の解析を目指す。

(3) 批評的視点を獲得するためのキーワードを生み出す

先史時代人イメージをめぐる議論の空転はこの問題を語る言葉の不在も原因となっている。そのため、(1) と (2) を受けて、先史時代人イメージを批評的に語るキーワードを生み出すことを目指す。

３．研究の方法

以上の研究目的のために、以下の方法を採用した。

（1）先史時代人がビジュアライズされた事例を、教科書や学習歴史マンガ、博物館展示図録などをとおして収集する文献調査を行う。同時並行で博物館展示を現地で観察するフィールド調査を行い、復元イメージの変遷・多様性を把握する。
イメージ収集の対象は旧石器・縄文・弥生・古墳時代人イメージとした。弥生・古墳時代は原史時代と捉えられ、先史時代と区別されることもあるが、後述するように両時代を検討対象としたことによって、最も変化と多様性が著しい縄文時代人イメージの特異性を明確にすることができた。

（2）①新たな考古学的発見、②考古学の研究動向、③先行する先史時代人像、④人々の先史時代への見方、これら４要素と先史時代人イメージの影響関係を検討する。
この４要素は上記セミナーでの議論を受けての予備的な検討から設定したものである。結果として、これら４要素のイメージへの影響はそれぞれ異なるものであることも分かり、予備的検討における設定はうまく機能したと評価できる。

４．研究成果

先史時代人のビジュアルイメージの変遷を明らかにし、視覚化の背景にある視座とメカニズムについて批評的視点を獲得するための複数のキーワードを提示することができた。
各地の博物館では、古墳時代人イメージは少なかった。人物埴輪等、当時の人の姿を具体的にイメージできる資料が多い時代の人のイメージはあまり作られない傾向にある。一番遠い過去として設定された時代であり出土資料が相対的にとても少ない旧石器時代、『魏志倭人伝』に記述のある「貫頭衣」という衣服のイメージが定着している弥生時代と比べて、もっとも変化が激しく多様性がみられたのは、縄文時代人のイメージだった。本研究で扱う先史時代人ビジュアライゼイションに関する最大のアリーナと言える縄文時代人イメージの分析からは、イメージを語るためのキーワードも生み出された。以下にその結果を述べる。

（1）縄文時代人イメージの変遷（図１）

日本において先史時代のイメージ画を描くことは、19 世紀末、考古学・人類学の黎明期にはじまった。1893 年の大野雲外による石版画＜日本旧土人「コロボックル」石斧を研ぎ獣肉を煮る図＞、日本初のグラフィック誌と言われる『風俗画報』に 1895 年から 96 年に連載された「コロボックル風俗考」は最初期の試みである。これらは東京帝国大学理学部に人類学教室を創設した坪井正五郎が監修している。坪井は当時各地で発見されていた石器時代資料、後に縄文時代と呼ばれることになる時代の土偶等を参照してコロボックルの「風俗」「復元」を試みたことを各所に記している（例えば坪井 1893）。「コロボックル風俗考」からおよそ 10 年後の 1907 年には織田東禹の水彩画＜コロボッグルの村＞が東京勧業博覧会に出品された。その作品は坪井のコロボックルとイヌイットの相類説を受けた説明図ともなっている。

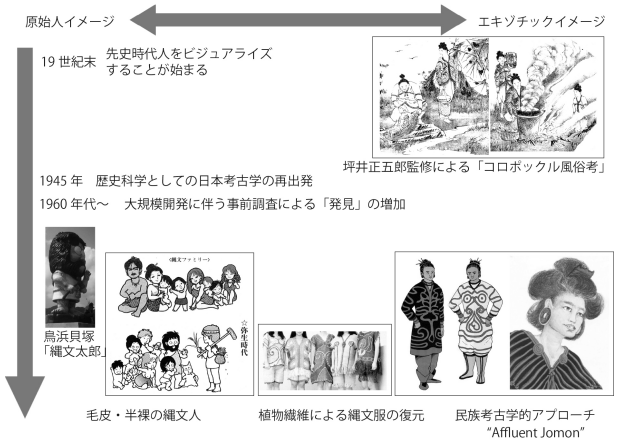

図 1：縄文時代人イメージの変遷

19 世紀末から 20 世紀初頭の日本における先史、あるいは遠い過去の祖先のイメージは、実際の出土遺物の観察と民族考古学的思考がコロボックル説を介して視覚化されたものと言える。黎明期の考古学研究は坪井のコロボックル説に代表される人種論に傾倒しすぎた時期と評価されることもあるが、先史時代人イメージは出土資料に立脚しようとしたものだった。この姿勢が 1945 年以降は見られなくなる。
1945 年以降に先史時代人イメージが多くみられるのは、教科書の挿絵や学習マンガなどである。それらを収集してみると、1950 年代から毛皮と思しきものを着た半裸の人のイメージが流布していることがわかる。毛皮や布らしきもので古代ローマの衣装トガのように片方の肩から上半身・膝上までを覆っている、あるいは腰から膝上までは毛皮を纏い上半身は裸という例が多い。日本列島の先史時代人イメージは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての上下ともに服を着た「コロボックル」イメージから一転、戦後は半裸の原始人イメージの再生産が繰り返されることになった。
坪井がおこなっていたような土偶を参照して衣服や髪型を復元する試みは、小山と安芸が縄

文晩期の遮光器土偶やミミズク土偶をもとにしたイメージを提示することで再び行われるようになる（小山編 1986）。佐々木高明も土偶と北東アジアの少数民族を参照している（佐々木 1991）。それら 1980・90 年代のイメージと 19 世紀末の「コロボックル」イメージは、土偶や北方少数民族を参照するという方法上の類似から似ている部分が多い。戦後に主流となる「原始人像」に 19 世紀末以来の民族考古学的思考のリバイバル、低湿地出土資料等から直接的に、土器圧痕等から間接的に研究できる、縄文時代に確実に存在した編布の研究成果（例えば尾関 1996）の受容・適用が加わり、縄文時代人イメージは多様性を獲得することになった。

次に、この変化と多様性を批評するためのキーワードを提示する。

（2）イメージを批評するためのキーワードの提示（図２）

先史時代人イメージをめぐるコミュニケーションを「正しいか否か」の二元論に回収されることなく豊かにするために、以下の複数のキーワードを提示する。

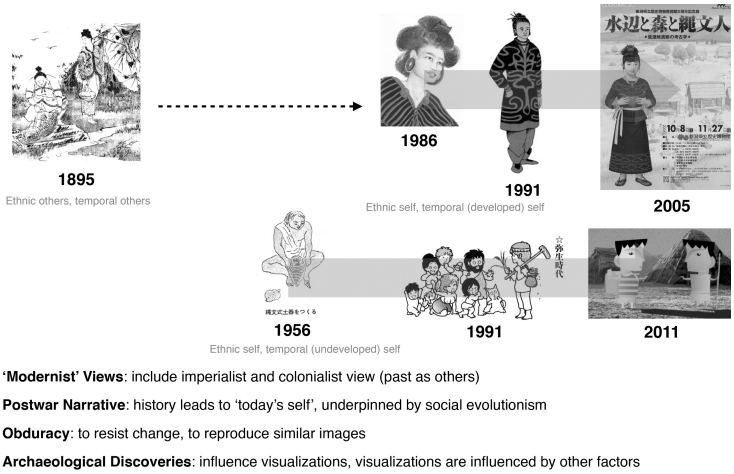

図 2：先史時代イメージをめぐるキーワード

Modernist View: 近代人としての眼差し

近代社会の所産である考古学・博物館学の担い手が近代人であろうとしているのは当たり前のことのように思えるかもしれないが、この眼差しが帝国主義的・植民地主義的視座と切り離せないことを、先史時代人イメージを語る上では強調する必要がある。坪井正五郎は日本における先史時代人イメージ作成のパイオニアと位置付けられるが、同時に坪井は「人間展示」で悪名高い「学術人類館事件」に代表される、当時の帝国主義的・植民地主義的視座から自由ではない人物でもあった。「人間展示」は当時の帝国日本からみて「異文化」の人々を対象に企画されたが、遠い過去という「異文化」のイメージである先史時代イメージにも、この視点はついて回ることを自覚することが必要である。

Postwar Narrative: 戦後に合理主義的進化論の台頭によって獲得された物語

先史時代人イメージの傾向は 1945 年以降、大きく変化した。遠い過去が現在の我々に連なる歴史として認識された時に、社会進化論が適用された結果、遠い過去の人々はそれ以前とは一転して、未発展な人々と描かれることになり、現に出土している資料とは無関係に思えるイメージが氾濫することにもなった。この視点も先の Modernist View 同様、両義性があると捉えることの必要性を、先史時代人イメージ分析は自覚させてくれる。

Obduracy: 一度作られた復元画が繰り返し用いられる傾向が著しい

このキーワードは「変化に抵抗する様」という意味だが、先史時代人イメージそのもの、またそれらが描かれる場面の固定化にも適用できる。旧石器時代であれば「狩り」の場面、縄文時代であれば土器を粘土紐の輪積みで作る場面、弥生時代であれば水田稲作の場面、古墳であれば古墳築造の場面が先史時代イメージにおいて繰り返しみられる。ただしこのことは、次の考古学の研究成果を重視することと裏表の関係でもある。

Archaeological Discoveries: それでも、考古学的発見は新たなイメージづくりのトリガーとなる

先の描かれる場面の固定化は、考古学的発見のインパクトも同時に示している。縄文土器が粘土紐の輪積みで作られること、弥生時代が水田稲作導入の時期であること、古墳築造のメカニズムが発掘調査成果の賜物であることは考古学にとっては動かし難い、立脚すべき（近代科学としての考古学の）ボトムである。この「底堅さ」をもとに考古学的想像力をさらに豊かにするには、これまで列挙したキーワードが先史時代「人」イメージのみならず、先史時代イメージを語る際に必要

この他、描かれる人々と我々＝自画像の関係についてのいくつかのキーワードを以下のように提示したい。

19 世紀末の Modernist View で描かれた縄文時代人イメージにおいて、描かれる人々は「民族的」にも、「時間的」にも「他者」である。戦後の Postwar Narrative の影響下にあるイメージにおいて、描かれる人々は民族的には「自己」、時間的には「未発展な自己」である。そして今では

affluent forager（豊かな採集民）イメージを生み出した民族学との学際研究である民族考古学者によって、描かれる人々には「遠い過去においても発展した自己」が投影される可能性を有するようになった。

イメージを作り、受容する我々と遠い過去の人々のエスニシティと連続性についての認識もイメージに影響を与えていると捉え直すことは、先史時代イメージについて語ることを、より豊かにすることが期待できる。そして、こうしたキーワードは人の姿以外の復元イメージ、具体的には復元建物・景観の分析にも応用することができた（Ertl and Yoshida 2021 等）。

＜引用文献＞

Ertl, John and Yasuyuki Yoshida. 2021. Approached to Experimental Pit Dwelling Reconstructions in the Japanese Central Highlands: Architectural History, Community Archaeology, and Ethnology. Presented at: 12th Experimental Archaeology Conference. Online. March 29–April 1.

小山修三 編. 1986. 縄文人の家族生活 (週刊朝日百科『日本の歴史』). 東京: 朝日新聞社.

小山修三. 2017. なぜ「おしゃれ」な縄文人を描こうとしたのか. 吉田泰幸・John Ertl 編. Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013–2016. 77–84.金沢: 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター.

尾関清子. 1996. 縄文の布: 日本最古の布を復原. 東京: 学生社.

佐々木高明. 1991. 日本史誕生: 日本の歴史 1. 東京: 集英社.

坪井正五郎. 1893. 日本全国に散在する古物遺跡を基礎としてコロボックル人種の風俗を追想す. 史学雑誌 4(40): 1–16.

吉田泰幸・John Ertl 編. 2017. Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013–2016. 金沢: 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Ertl, John, and Yasuyuki Yoshida	４．巻 26
２．論文標題 Archaeological Craftwork 2020: Ethnography of Archaeology at Suwahara Site, Hokuto City, Yamanashi 2020	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Hiyoshi Review of the Humanities	６．最初と最後の頁 37-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田泰幸	４．巻 75
２．論文標題 翻訳者ノート―人類博物館か人間博物館か	５．発行年 2019年
３．雑誌名 貝塚	６．最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ナタン・シュランガー（吉田泰幸 訳）	４．巻 75
２．論文標題 新・人間博物館、その歴史と進化	５．発行年 2019年
３．雑誌名 貝塚	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田泰幸	４．巻 721
２．論文標題 先史のイメージの図像学	５．発行年 2019年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田泰幸	４．巻 46(13)
２．論文標題 過去を資源化する考古学の現在―政治、環境、芸術	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 114-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Ertl, John and Yasuyuki Yoshida
２．発表標題 Approached to Experimental Pit Dwelling Reconstructions in the Japanese Central Highlands: Architectural History, Community Archaeology, and Ethnology
３．学会等名 12th Experimental Archaeology Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoshida Yasuyuki
２．発表標題 Making heritages towards AD2500: archaeology as reconnections to objects, heritage as remembering things
３．学会等名 25th Annual Meeting of the European Association of Archaeologists（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田泰幸
２．発表標題 日本列島先史時代人の復元画を／から考える
３．学会等名 東京大学大学院文化資源学研究室
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yasuyuki Yoshida
２．発表標題 Visualizing Prehistoric People in Japan: from the Perspective of Sociology of Archaeological Knowledge
３．学会等名 Theoretical Archaeology Group 2017, Cardiff（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yasuyuki Yoshida
２．発表標題 Politics of Japanese School Textbooks and Prehistoric Archaeology
３．学会等名 Anthropology of Japan in Japan Fall Meeting, Kyoto（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

耕論: 縄文、若者もハマる（朝日新聞2019年4月9日朝刊） https://www.asahi.com/articles/DA3S13970457.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関